

ニュース

青年海外協力隊養蜂隊員の派遣

国際協力事業団青年海外隊の養蜂隊員として川戸円さん（平成14年3月、玉川大学農学部卒）が4月10日にフィリピンに赴任した。フィリピンでは、ラ・ユニオン州にあるドン・マリアノ・マルコス・メモリアル大学養蜂普及センターに配属され、現地で2年間養蜂指導に従事する。

同じく横井秀輔氏（平成14年3月、崇城大学工学部卒）がパラグアイに赴任した。NGO団体であるモイセス・ベルトニー財団に配属され、カニンデジュ県イガテミ市で2年間養蜂普及プロジェクトに従事する。

オオスズメバチの複数成分系 警報フェロモン解明 英国ネイチャー誌に論文掲載

オオスズメバチは、多くのミツバチ愛好家から恐れられる深刻な養蜂害虫である。近年では衛生害虫としても社会的な注目を集めている。一方、自然生態系においては、生物多様性の保持に大きく貢献する捕食者として重要な機能をもっており、ヒトとの共存を図るために生態解明が待たれている昆虫でもある。今回、当研究施設の小野助教授を中心としたグループにより、巣門の前で門番から噴射される毒液中に、敵の襲来を巣内の仲間に伝達する情報化学物質「警報フェロモン」の存在することが突き止められた。有効成分は、蜂毒に含まれる2種類のアルコールとエステルで、それらの3成分が混合された時、激しい防衛行動の誘発が確認された。また、そのエステルは、オオスズメバチが集団攻撃の際に仲間を呼ぶために使用する餌場マークフェロモンの分泌腺に含まれていることも明らかにされた。これらの発見は、ネイチャーの8月7号に掲載され、朝日、読売、毎日、産経、日経などの各紙、NHK、BBC、CNNなどのマスメディアを通じて報道された。

ミツバチの性決定遺伝子の研究者 Martin Beye 博士の来訪

6月27日、ドイツ・ハレのマーチンルター大学動物学部準教授のBeye博士が、独立行政法人畜産草地試験場みつばち研究室の木村澄博士にご同道いただいで当施設を来訪された。農学部を学生を対象としたセミナーでは「ミツバチの社会行動から性決定遺伝子まで」の演題でご講演をいただいた。講演の中でも言及されたミツバチの性決定遺伝子の機能に関する論文が先頃Cell誌に掲載された。分子生物学的にみた性決定遺伝子の機能から、実際のミツバチの性決定がどのように起こるのかを明らかにした手法的にも画期的な研究となっている。



セミナーの打ち合わせをする Beye 博士と木村博士

編集後記 今号より誌面の見映えが多少変わったと思われた方もいるだろう。というのも、編集全般を当研究施設で、いわゆるDTP（デスクトップパブリッシング）で行うことになったためである。印刷所とのやりとりが減り、原稿から誌面イメージの完成まで大幅に短縮されるようになった。その分手間はかかるようになったが、著者校に図版を含められるようになるなど、利点も多々ある。誌面の見やすさも改善目標に含めていくので、ご要望があれば是非お聞かせ願いたい。さて、松浦教授の第2弾では、川崎市内で見つかったオオミツバチの巣が紹介されている、驚くべきことだが、船に乗っての渡来の可能性は高まっているといわれる。京大渡辺名誉教授には「タイの食用昆虫記」からミツバチ関係の部分を改めて書き起こしていただいた。AAAフィリピン大会も多くの方に参加いただきたい。（純）